

【翻訳】

## ハンドボール選手が知覚するリーダーシップ スタイルと逸脱の関係

柳在忠 (ユ・ゼチュン)<sup>\*1</sup>

井上元輝<sup>\*2</sup> 庄司直人<sup>\*2</sup> 尹 熙喆<sup>\*2</sup>

### I. 研究の必要性および目的

規則と規範は、社会秩序の維持のためにある。規則なしに、スポーツは存在出来ない。つまり、スポーツとは競技規則に則って競争的な機会に参加することである。スポーツの場は、日常生活においても重要な規範を守りながら生活することに寄与する(イム・ビョンジャン, 1994)。このように、スポーツへの参加によって道徳性・守法性・公平性などの価値観と行動様式を修得できるという肯定的な側面がある。しかしながら、現実的には、チームスポーツへの参加者はいつも勝利を追求しなければならないといった目的と、勝敗に関わらず正々堂々と競技に臨まなければならないといった道徳的な規範との間で葛藤を内包している。

実際に、多くの研究者たちはチームスポーツへの参加は社会逸脱を予防したり抑制したりすることに肯定的な役割を果たすと報告している(グ・チャンモ, 1991; キム・カンフン, 1988; ジョン・ヨンリン, 1987; コン・スンヨン, 1992; Segrave & Chu, 1978; Segrave & Hastad, 1982, 1984)。一方、スポーツへの参加は典型的な非行行動を誘発する組織的な体系であり、スポーツへの参加者はその集団内で構造的・文化的に制約され、容認された暴力・攻撃性・規則違反などの逸脱行動を内外的に修得させられてきたという批判が持続的に提起されてきた(Faulkner, 1976; McMurty, 1974; Thrasher, 1963)。

これまで、スポーツと社会逸脱との関係に関する研究は、主に、スポーツ選手と一般学生との逸脱の構造的な相違や媒体・過程を究明しようとする社会構造的な観点に基づくものが主流であり、社会的な相互作用の立場からチームスポーツへの参加と社会逸脱との関係を究明しようとする研究は相対的に少ないのが現状である(コン・スンヨン, 1992)。

スポーツ選手は、社会性や道徳性の発達に最も敏感な青少年期を運動部集団の中で過ごす。したがって、運動部集団の特性はスポーツ選手の価値観および行動様式に直接的に影響を及ぼす。また、練習と試合を含め、選手個人の私生活と行動が運動部の監督やコーチなどの指導者によって統制される運動部集団の場合、選手の価値観や行動様式は指導者の役割やリーダーシップから影響を受けると言える。このような一連の関係性は、一部の監督やコーチの勝利至上主義の強迫観念や過度な欲求で、競技規則やスポーツマンシップに反することを助長したり、逸脱行為を放任したりする事例からもよめるように、相互関係性について説得力があると考えられる。

結局、チームスポーツに参加するスポーツ選手たちの社会的逸脱行動は、一般社会の構造や過程によることよりも、両立不可能な価値志向、価値観および規範と成功強迫観との不一致、競争的な補償構造などに特徴づけられる運動部集団の価値葛藤にその根拠を置き、運動部集団の管理者であり、責任者でもある指導者の役割やリーダーシップによって、直・間接的に影響を受けると言えるのである。

したがって、運動部集団の特性上、監督やコーチが運動選手の価値観や行動様式の形成に重要な影響を及ぼすという仮定で、ハンドボール選手を対象に、彼らが認知する指導者のリーダーシップのスタイルと社会

受付日 2018.1.22

\*1 著者:【韓国】慶熙大学体育学部スポーツ指導学科。この原著論文は、韓国スポーツ社会学会誌(2004)第17巻第3号 pp.209-219に掲載された。

\*2 翻訳者:朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

逸脱との関係について究明することを本研究の目的とした。設定した具体的な研究目的は次の三つの通りである。

- 一。ハンドボール選手が認知しているリーダーシップと逸脱にはどのような関係性があるか？
- 二。ハンドボール選手が認知しているリーダーシップと逸脱には性別ごとでどのような関係があるか？
- 三。ハンドボール選手が認知しているリーダーシップと逸脱には競技レベルごとでどのような関係があるか？

## II. 方法

### 1. 調査対象

本研究では、ハンドボール選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱との関係を究明するために、2004年ソウル特別市、京畿道（キョンギド）の体育会に登録されている高校および大学のハンドボール選手たちを母集団として設定し、クラスターランダム抽出法（stratified cluster random sampling）を使って計185名を抽出した。収集した185名の回答の中で、回答内容の信頼性が低いと判断された29名の回答を除いた計156名（男：108名、女：48名）の質問紙への回答をサンプルとして採用した。

### 2. 設問項目

ハンドボール選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぼす影響を把握するため、本研究では、Bass（1985）の多要因リーダーシップ尺度（Multi-factor Leadership Questionnaire ; MLQ）と、グ・チャンモ（1991）、ギョン・スンヨン（1992）、オ・ヨンワン（1998）などの国内の逸脱に関する先行研究において信頼度および妥当性が検証され用いられた尺度を採用した。そして、予備検査を行い、尺度の各項目の適合性および適用可能性と、妥当性や信頼性の有効性を確認した。

本研究の先行変因としては、2003年度・2004年度に行われた全国大会規模の試合で準決勝以上の競技成績を残したチームに所属していた優秀選手と、準決勝以下の競技成績のチームに所属していた非優秀選手として区分した。

本研究の、独立変数である「ハンドボール選手が知覚するリーダーシップスタイル」の測定項目は、カリスマ17項目、個別的配慮6項目、知的刺激3項目、条件的補償6項目、例外的管理5項目など、計37項目で構成した。応答形態は5段階評定尺度に構成し、「あてはまる」に5点、「ややあてはまる」に4点、「どちらもない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「全くあてはまらない」に1点を付与した。従属変数の逸脱測定項目は、計13項目（公共秩序、財産非行、地位非行、対人非行、隠遁非行）である。しかし、リーダーシップのスタイルが逸脱行動に及ぼす影響を明らかにすることが目的であるため、実際に分析を行うにあたっては、逸脱の下位尺度を細分化して分析を行わず、全体項目を合わせて逸脱水準をあらわす複合的指標（composite index）を構成した。結果を処理する時、応答形態は、逸脱点数が高ければ逸脱の程度が低いとし、5段階評定尺度で「あてはまる」に5点、「ややあてはまる」に4点、「どちらもない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「全くあてはまらない」に1点を付与した。一方、本研究が採択したハンドボール選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱尺度に関する設問項目に関する信頼度を検証した結果、 $\alpha = .8058$ 、 $\alpha = .8472$ で各項目の信頼性が確認された。

### 3. 調査手続き

本研究では、まず、質問紙を研究対象に配布し、自己評価記入法（self-administration method）を実施した。その際、質問調査の指針について熟知している補助者3名と共に、本研究者が対象者を直接訪ね、本研究の趣旨・目的について説明した後に回答を実施してもらった。

#### 4. 資料処理

回収した質問紙の中で、回答内容が不十分あるいは資料分析に適してないと判断された資料は、分析対象から除いた。分析対象となったデータのみを入力し、SPSS for Windows (version11.0) を利用して分析を行った。

本研究では統計分析の方法として、独立変数と従属変数間の関連性を検証するために相関関係分析 (Pearson correlation) を行い、また、独立変数が従属変数に及ぼす影響を調べるために多重回帰分析を実施した。

### III. 結果

#### 1. 選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱要因との相関関係

「表1」は Pearson の相関関係を用いて選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱要因との相関関係を算出した結果である。

表1 選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱との関連

リーダーシップスタイル		1	2	3	4	5	6
変革型 リーダーシップ	1. カリスマ	-	.540***	.686***	.623***	.289***	-.010
	2. 個別的配慮		-	.479***	.504***	.286***	.412***
	3. 知的刺激			-	.520***	.320***	-.186*
交換型 リーダーシップ	4. 条件的補償				-	.433***	-.038
	5. 例外的管理					-	-.096
	6. 逸脱						-

\* $P < .05$  \*\*\*  $P < .001$

「表1」のリーダーシップのスタイルと逸脱との相関を見ると、個別的配慮 (.412\*\*\*) では正の相関が、知的刺激 (-.186\*) では負の相関があり、カリスマ・条件補償・例外的管理では有意な相関がないことがわかった。

#### 2. 選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぼす影響

「表2」は選手が知覚するリーダーシップのスタイルに逸脱が及ぼす影響に関する多重回帰分析を行った結果である。

表2 選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぼす影響に関する多重回帰分析

リーダーシップスタイル		b	$\beta$	t	Sig.
変革的 リーダーシップ	カリスマ	.072	.021	.210	.834
	個別的配慮	2.629	.708	8.909	.000
	知的刺激	-1.281	-.434	-4.796	.000
取引的 リーダーシップ	条件的補償	-.483	-.136	-1.524	.130
	例外的管理	-.307	-.107	-1.496	.137
		$R^2 = .388$			

「表2」のリーダーシップのスタイルの中で、個別的配慮 ( $\beta = .708$ ) が有意に正の影響を及ぼすこと、知的刺激 ( $\beta = -.434$ ) が有意に負の影響を及ぼすことがわかった。一方、カリスマ、条件的補償、例外的管理は有意な影響を及ぼさず、5つのスタイルによる逸脱に関する重回帰係数は  $R^2 = .388$  であった。この結果から、選手が知覚するリーダーシップのスタイルとして個別的配慮が高ければ高いほど選手たちの逸脱行

動が低くなること、リーダーシップのスタイルが知的刺激として知覚された場合には逸脱行動が高くなること
 がわかった。

### 3. 性別による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぼす影響

「表3」は性別による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぼす影響に関する多重回帰分析
 を行った結果である。

表3 性別による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぼす影響に関する多重回帰分析

変革的リーダーシップ		男		女	
		b	$\beta$	b	$\beta$
変革的 リーダーシップ	カリスマ	.855	.251	-.321	.078
	個別的配慮	2.376***	.666	3.401*	.828
	知的刺激	-1.801***	-.592	-.990	-.252
取引的 リーダーシップ	随伴的報酬	-.894*	-.246	-.037	.011
	例外的管理	-.548*	-.195	-.099	-.031
R <sup>2</sup>		.465		.400	

\*P<.05 \*\*\* P<.001

「表3」のリーダーシップのスタイルの中で、男子集団においては、個別的配慮 ( $\beta = .666$ ) では有意に
 正の影響を、知的刺激 ( $\beta = -.592$ )、条件的補償 ( $\beta = -.246$ )、例外的管理 ( $\beta = -.195$ ) では有意に負
 の影響を及ぼした。女子集団においては、個別的配慮 ( $\beta = .828$ ) が有意に正の影響を及ぼした。一方、
 男子集団においてはカリスマ、女子集団においてはカリスマ・知的刺激・条件的補償・例外的管理の項目
 が有意な影響を及ぼさないことがわかった。5つのスタイルの逸脱に関する相関係数は、男子集団では  $R^2 = .465$ 
 ( $F = 17.759$ )、女子集団では  $R^2 = .400$  ( $F = 5.598$ ) であった。

これらの結果から、性別による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぶ影響は、男子・女子
 両方において、個別的配慮 (+) でリーダーシップを知覚する集団に逸脱行動が低くなること、男子集団
 においては知的刺激 (-)、条件的補償 (-)、例外的管理 (-) でリーダーシップのスタイルを知覚するほど、
 逸脱行動が高くなることを意味すると考えられる。

### 4. 競技成績による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぶ影響

「表4」は競技成績による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぶ影響に関する多重回帰
 分析を行った結果である。

表4 競技成績による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぶ影響に関する多重回帰分析

変革的リーダーシップ		優秀選手		非優秀選手	
		b	$\beta$	b	$\beta$
変革的 リーダーシップ	カリスマ	-.250	.071	1.053	.309
	個別的配慮	2.350***	.618	4.772***	1.292
	知的刺激	-1.273***	-.429	-2.172***	-.756
取引的 リーダーシップ	条件的補償	-.405	-.119	-.946	-.239
	例外的管理	-.232	-.084	-1.304*	-.416
R <sup>2</sup>		.412		.497	

\*P<.05 \*\*\* P<.001

「表4」のリーダーシップのスタイルの中で、優秀選手においては、個別的配慮 ( $\beta = .618$ ) が有意に正

の影響を及ぼすこと、知的刺激 ( $\beta = -.429$ ) が有意に負の影響を及ぼすことがわかった。非優秀選手においては、個別的配慮 ( $\beta = 1.292$ ) が有意に正の影響を及ぼすこと、知的刺激 ( $\beta = -.756$ )、例外的管理 ( $\beta = -.416$ ) が有意に負の影響を及ぼすことがわかった。一方、優秀選手ではカリスマ・条件的補修・例外的管理の項目が、非優秀選手ではカリスマ・条件的補償の項目が有意な影響を及ぼさないことがわかった。5つのスタイルの逸脱に関する相関係数は、優秀選手では  $R^2 = .412$  ( $F = 14.461$ )、非優秀選手では  $R^2 = .497$  ( $F = 8.105$ ) であった。

これらの結果から、競技実績による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぶ影響は優秀選手では個別的配慮 (+) でリーダーシップを知覚する選手の逸脱行動が低くなること、知的刺激 (-) でリーダーシップを知覚する選手の逸脱行動が高くなることがわかった。一方、非優秀選手では、個別的配慮 (+) でリーダーシップを知覚する選手の逸脱行動が高くなったが、知的刺激 (-)・例外的管理 (-) でリーダーシップを知覚するほど、逸脱行動がより高くなることがわかった。

## IV. 論議および結論

### 1. 論議

一般的に、どのような集団においても指導者の資質や能力や指導方法は、その集団の性格とメンバーの態度に大きい影響を与えることだけではなく、その集団の目標達成にも大きな影響を与える。そして、指導者の諸行動の一貫性や選手たちが好むリーダー行動や、スポーツ状況から要求されるリーダー行動は高い満足を引き起こすことがわかった。よって、本研究者は選手たちの特性に適するリーダーシップのスタイルが競技力向上だけではなく、選手たちの逸脱に密接な関連性があると判断し、ハンドボール選手を対象に知覚する指導者のリーダーシップのスタイルを分析することによって、リーダーシップと逸脱との関連性を究明しようとした。

本研究の結果によると、ハンドボール選手は性ないし競技水準に関係なく、指導者の個別的配慮のリーダーシップスタイルが高い場合に逸脱水準が低く現れた。この結果は、スポーツ指導者が選手個人の潜在能力と動機に従って課題を提示したりすることで、一対一の関係性を通して相互理解が高くなり、お互いに馴染むことで逸脱を減らすことができるということを意味する。

この結果は、コン・スンヨン (1992) の「スポーツの社会統制的な要因と運動選手非行との関係に関する研究」においても、コーチや監督などのように重要他者との感性的な繋がりが高ければ、非行水準が低くなるといった報告と一致するのである。要するに、社会統制理論的な観点から見ると、選手自身が所属したチームのコーチや監督のリーダーシップが個別的配慮として認識されるハンドボール選手は、チームに対する愛着や関与水準が高まる一方、ネガティブな影響を及ぼす行動に対しては、その行動に内的及び外的統制が強化されることになり、相対的に逸脱が少なくなると解釈することができるだろう。

また、本研究の結果によると、知的刺激としてリーダーシップを強く認識するハンドボール選手には逸脱が高く現れた。このことは、知的刺激に関連するリーダーシップの特性と関係があると考えられる。つまり、知的刺激が高いリーダーは進取的・創造的・革新的な思考ができるように選手たちを掻き立てる特徴を持つが、一方、このことをやり過ぎる場合は自由放任や逸脱行動を助長する可能性が生ずるのである。

一方、スポーツ指導者のリーダーシップのスタイルと逸脱との関連性は、選手の肯定的な側面に賞賛及び補償を与えたり、不充実な行動に処罰したりする取引的リーダーシップと、選手たちの信念と価値観に転換をもたらせて選手自身の能力を乗り越えられるように鼓舞させ、将来的により大きい目的を追求させようとする変革的リーダーシップにおいては、指導者によって各々違う意味としてあらわれる場合がある。もっとも大事なことは、種目別・集団別に適する指導者のスタイルは差異が生じるわけで、選手たちが知覚する指導者のリーダーシップの行動様式は相違的であることである。従って、スポーツ指導者のリーダーシップのスタイルと逸脱の相互関連性をもっと具体的に明らかにするためには多様な種目と集団における研究が必

要であると考えられる。また、指導者は選手の経歴・性・動機・技術水準・運動種目などによって選手たちに、好きなリーダーシップのスタイルが彼らの満足度と成長・発展および競技に相当な影響を及ぼすことを十分に認識し、それらにあわせた望ましい資質を備えることに努力を払うことが必要である。

## 2. 結論

本研究では、ハンドボール選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱との関係を究明することに目的がある。本研究における検討の結論は、以下のように整理することが出来る。

- ① 選手が知覚するリーダーシップのスタイルと逸脱要因の間の相関関係を検討した結果、個別的配慮はプラス相関関係で、知的刺激はマイナス相関関係にあらわれた。相関関係に基づいて多重回帰分析を行った結果、逸脱に及ぶ影響力は、個別的配慮としてリーダーシップを認識すると、逸脱行動が低く、知的刺激としてリーダーシップを認識すると、逸脱行動が高かった。
- ② 性別による選手が知覚するリーダーシップのスタイルが逸脱に及ぶ影響に関する多重回帰分析を行った結果、男・女集団いずれにおいても個別的配慮としてリーダーシップを知覚する選手の逸脱行動は低くあらわれたが、男子集団においては知的刺激・条件的補償・例外的管理としてリーダーシップを知覚すると、逸脱行動が高かった。
- ③ 優秀選手の場合、個別的配慮としてリーダーシップを知覚すると、逸脱行動が低くあらわれた一方、知的刺激としてリーダーシップを知覚する選手においては逸脱行動が高かった。非優秀選手においては、個別的配慮としてリーダーシップを知覚する選手たちは逸脱行動が低い一方、知的刺激・例外的管理としてリーダーシップを知覚する選手たちは逸脱行動が高かった。

## 参考文献

- 1) Bass, B. M. (1985) Leadership and Performance Beyond Expectations, New York: Free Press.
- 2) Faulkner, R. R. (1976) Violence: Camaraderic and occupations character in hockey. Paper presented at the Conference on Sport an Social Deciance, SUNY, Brockport.
- 3) グ・チャンモ (1991) 体育環境が青少年非行に及ぶ影響. 博士学位論文. ソウル大学大学院.
- 4) イム・ビョンジャン (1994) スポーツ社会学論. ソウル: 東亜文化社.
- 5) ジョン・ヨンリン (1987) スポーツ参加と青少年の非行に関する研究. 修士学位論文. ソウル大学大学院体育教育科.
- 6) キム・カンフン (1988) 運動選手の非行要因に関する経路分析的研究. 修士学位論文. ソウル大学大学院体育教育科.
- 7) コン・スンヨン (1992) スポーツの社会統制的要因が運動選手の非行に及ぶ影響. 修士学位論文. ソウル大学大学院体育教育科.
- 8) McMurty, W .R. (1974) Investigation and inquiry into violence in amateur hockey. Ministry of community and social service under the public inquire. Act, 1970.
- 9) オ・ヨンワン (1998) 青少年運動選手の非行に関する研究. 修士学位論文. 韓国教員大学大学院.
- 10) Segrave, J.O. & Chu, D. (1978) Athletics and Juvenile delinquency. Review of Sport and Leisure, 3, 1-24.
- 11) Segrave, J.O. & Hastard, D. (1982) Delinquent behavior and interscholastic athletic participation. Journal of Sport Behavior, 5, 96-111.
- 12) Segrave, J.O. & Hastard, D. (1984) Interscholastic athletic participation and delinquent behavior: An empirical assessment of relevant variables. Sociology of Sport, 1.
- 13) Thrasher, F. M. (1963) The gang. Chicago: University of Chicago Press.